

令和2年度 標準的学力調査の結果

学校支援課

令和3年1月に実施した標準的学力調査（東京書籍版C R T）の結果をお知らせします。

1 各教科の平均正答率（％）について

【中学校2年生・理科】※標準スコア…全国の平均正答率を50としたときの換算値

年度	新潟市	全国	全国との差	標準スコア
令和2年度	58.9	58.1	+0.8	50.4
令和元年度	54.2	56.3	-2.1	49.0
平成30年度	56.4	57.4	-1.0	49.6

【中学校2年生・英語】※標準スコア…全国の平均正答率を50としたときの換算値

年度	新潟市	全国	全国との差	標準スコア
令和2年度	56.8	54.3	+2.5	51.1
令和元年度	57.2	55.4	+1.8	50.8
平成30年度	55.9	55.5	+0.4	50.2

2 中学校2年生・理科の概要について

【領域別等の平均正答率】

標準スコアは、50.4（昨年度49.0）と全国平均と比べてやや上回った。

「基礎」の正答率は、全国平均を-0.6（昨年度-1.7）下回っていたが、「活用」の正答率は、全国平均を+5.5（昨年度-3.0）上回っていた。

領域別に正答率を全国平均と比較すると、「エネルギー」領域は+2.4（昨年度-6.7）と上回り、「粒子」領域は-0.8（昨年度+0.5）と少し下回った。また、「生命」領域は+2.0（昨年度-2.8）と上回っていた。なお、「地球」領域は、まだ未履修のため調査対象より除外してある。

今回の調査から、前回と同様に、微視的な事象を扱う「粒子」領域の定着に課題があることが明らかになった。また、用語などの基礎事項を理解することや、観察・実験方法の意図や結果を分析し解釈したことを表現したりすることをやや苦手としている。

【内容ごとの状況】

＜○…全国平均を上回った主な問題 ●…全国平均を下回った主な問題＞

- 水の電気分解によって陰極側に水素が生じたことを確かめる実験を考えることができる。
- 分解について理解している。
- マグネシウムの質量と加熱後の物質の質量の関係をグラフに表すことができる。
- マグネシウムの質量と結びつく酸素の質量の比を考えることができる。
- 化学変化が起こる時に温度が上がる反応を、「発熱反応」ということを理解している。
- 尿素が腎臓でとり除かれることがわかる。
- 魚類とハチュウ類の特徴が違うのは、生活する場所が違うからであるということを考えることができる。
- 加熱したときのパイナップルの物質を分離するはたらきを調べる実験を構想することができる。
- 未知の電流を測るときにつなげる電流計の端子を指摘できる。
- テレビを1時間使用したときの電力量を求める式を指摘できる。
- ブレーカーが作動しないような部屋につなぐ電気器具を選ぶことができる。

【今後の対応について】

- ◎ 基礎的な知識の習得は、観察・実験などの実体験と関連付けて学習するなど、概念的な理解ができるようにする。
- ◎ 実生活の事象から課題を見だし、科学的に探究（見通しをもって課題や仮説を設定し、観察・実験などを行い、根拠に基づく結論を導き出す）する過程を大切に授業を心掛ける。
また、既習内容や観察・実験から得られた事実などの情報を整理し、まとめることで自分の考えを形成し、アウトプットするなど、表現する場を設定する。
- ◎ 実生活の事象から課題を見いだしたり、解決した自然事象のしくみが実生活でどのように利用されているのかの理解を深める学習を行ったりする。
また、単元や内容のまとまりの終末で、学習過程（学習内容や学習方法）の振り返りを行うことで、自己の成長や学ぶ喜びを自覚させ、次への学びに向かう意欲を高められるようにする。

3 中学校2年生・英語の概要について

【領域別等の平均正答率】

新潟市全体の状況は、基礎・活用ともに全国平均を上回った。種別にみると「基礎」が全国平均より1.9ポイント（昨年度+2.0）、「活用」が3.6ポイント（昨年度+1.4）上回った。

領域別では、目標値と比べ、「聞くこと」の領域で+4.3（昨年度-0.2）、「読むこと」の領域で+0.4（昨年度+4.4）、「書くこと」の領域で+1.4ポイント（昨年度+1.0）だった。

長年課題だった「聞くこと」については、目標値を4.3ポイント上回り、大きな改善が見られた。「読むこと」については、全国平均を上回ったものの、目標値との差が+0.4と、昨年度を下回った。

観点別（現行の4観点）では、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」においては、目標値を上回り、特に「外国語理解の能力」が+4.3と高かった。

一方、「言語や文化についての知識・理解」において、目標値を2.2ポイント下回った。

【内容ごとの状況】

<○…「目標値」と「全国正答率」の両方を上回った問題>

<●…「目標値」と「全国正答率」の両方を下回った問題>

※ 網掛け…「目標値」と「全国正答率」の両方より5ポイント以上高い（低い）

【聞くこと】

○絵を適切に表している英文を聞き取ることができる。（時制と月）

○対話の内容を聞き取り、適切に応答することができる。

（どちらが好きかとたずねられて）

○対話の内容を聞き取り、適切に応答することができる。

（いつ練習するかとたずねられて）

○英文の概要を聞き取ることができる。

【読むこと】

●語形・語法を理解することができる。（動名詞）

●語形・語法を理解することができる。（have to）

●対話文の情報を正しく読み取ることができる。

○英文の情報を正しく読み取ることができる。

○英文と情報・条件をもとに、適切なものを選ぶことができる。

○英文と情報・条件をもとに、適切な絵を選ぶことができる。

○手紙の内容を把握することができる。

【書くこと】

- 英文を正しい語順で書くことができる。(be going to ~の否定文)
- 英文を正しい語順で書くことができる。(否定の命令文)

【今後の対応について】

◎ 目的，場面，状況の設定

「書くこと」の領域の『場面に応じて書く』という問題において、2問全国平均より高かったものの、目標値を下回った。外国語の見方・考え方に、『コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること』とある。

新学習指導要領において，言語活動の充実が求められているが，パフォーマンステストの際だけでなく，普段から，見方・考え方を働かせる必要がある活動を設定していくことが大切である。

また，「知識・技能」の問題においても，単なる穴埋め問題や日本文の内容に合わせた並び替えの問題にするのではなく，前後の文脈から内容を捉えたり，既習の言語材料と対比し，理解しているかを測るため，可能な限り場面，状況を想定した問題作りに努める必要がある。

◎ 言語統合的な活動の設定

ここ数年課題となっていた「聞くこと」は，大きく改善した。しかしながら，目標値を上回ったものの，同じく受信の技能である「読むこと」の数値は，他の技能と比べると，さほど高くはなかった。

新学習指導要領においては，聞いたこと，読んだことをもとに，話したり，書いたりするような言語統合的な活動が重視されている。コミュニケーションの目的，場面，状況を明確に設定した上で，聞いたり，読んだりした情報を基に，話したり，書いたりする活動を意図的に設定していくことが大切である。